

第3分科会

「伝えよう子どもの“未知普請”」

1. 分科会の概要

(1) 分科会のテーマ

「大人より、子らの感性、未知ひらく」と橋本氏の句にあらわされるように、子どもの感性を最大限に生かすために大人はどう向き合うのか、といった点を中心に考える。

(2) コーディネーター及びパネリストの紹介

コーディネーター

木下 勇 千葉大学園芸学部緑地・環境学科
教授

パネリスト

寺田 知代 貝塚市立南小学校教諭
平山 康弘 NPO法人鶴見川ネットワーク
理事・事務局長
山田 貴子 NPO法人子どもネットワーク
センター天気村理事長

(3) 分科会の進め方

まず、パネルディスカッションでは、木下氏をコーディネーターに、各パネリストからそれぞれの活動を紹介していただきました。そしてその後、KJ法を用いワークショップを行いました。子どもの感性や学習環境について等、様々な意見が寄せられました。分科会でのセッション報告後、参加者にアンケートを行い13名から回答を頂きました。最後に、コーディネーターから今回の会についてまとめとしてのコメントをいただいています。

2. パネリストの発表（活動紹介）

子どもたちの感性のきらめき

（寺田 知代氏 貝塚市立南小学校教諭）

私は総合学習を通じて、南小学校4年生と共に環境について学んでいます。それらを「河童（かわっば）GO!GO!」という劇にし上演しました。保護者の方は、近木川の下流が汚いを見て、上流も汚いと判断され、「中に入って遊んではだめ」と子どもたちに注意されたようですが、上流にきた子どもたちは、その水のきれいさに言いつけも守らず進んで川に飛び込んで行きました。また川で遊ぶ子どもたちがどれほど生き生きしているか、どんな名言をつぶやいたかは紹介しきれません。劇として上演した今、これからはどうするつもりなのかということに関しては、紙すきをやろうと思っています。何事も楽しかったねで終わらせるのではなく、継続性が必要だと思います。



発表するパネリスト

現在の子どもの感性は…

（山田 貴子氏 NPO法人子どもネットワーク
センター天気村理事長）

18年前に教師を辞め、「NPO法人子どもネットワークセンター天気村」を設立し活動しています。地球をまるごと遊び場に変えてしまおうという環境学習を通して現在の子どもの感性を紹介したいと思います。服が汚れることを気にせず遊ぶ子どもたちは、感性にあふれており、むしろ大人たちが彼らにひっぱられている、と感じます。また、怪我をしてもすぐ薬をぬったりせずそのままにしておいて、かさぶたを黥章とするやり方などを実践しております。今の子どもは怪我を

しても薬を塗ったり絆創膏を貼ったりするため、自然治癒力というものを知りません。薬や、絆創膏が治してくれたんだと思っています。そのままにすることで、血が固まって、やがてかさぶたになって取れていく過程を知ること、自分で怪我を治すことができるんだ、という感覚が子どもたちの自信につながっていくのです。



発表するパネリスト

パネリストへの質問、緑色のものには子どもたちの感性で気づいたこと、赤色のポストイットには子どもたちの感性を伸ばす際に問題になることの3点に分類し、一人の枚数を指定せず気づいたことをどんどん書き込んでいただくという形式をとりました。そうして書き込まれたポストイットを前の模造紙にグループ分けしながら貼っていきました。



発表するパネリスト

川をきれいにするにはどうすればいい？

(平山 康弘氏 NPO法人鶴見川ネット
ワーキング理事・事務局長)

私が行っている活動としては、日本一汚い川と言われた鶴見川に子どもたちを触れ合わせる活動を行っています。「この川をきれいにするにはどうすればいい？」という私の問いかけに「一度水を全部抜いて掃除する」「ビオトープを作って生き物がたくさんこれるようにする」などといった子どもたちの回答を元に、実際に子どもたちと小さなビオトープを作りました。

3. ワークショップ

各パネリストの報告後、ワークショップを行いました。同じテーブルに座る6、7名の参加者同士で話し合ってもらい、色別にしたポストイットに各項目ごとに対する意見を書き込んでいってもらいました。黄色のものに

その後、書かれた内容によってパネリストの方々や書かれた参加者本人の意見などを元に大人は何をしなければならないかを話し合いました。「テレビや携帯電話などのゲームの影響で、子どもは人生もリセットできると考えているのではないか」「大人の一般常識は子どもにとってナンセンスなのでは」と言ったような意見が挙がり、白熱した議論が繰り出されました。また、山田氏に対しての「マンションなどの住民のコミュニティはどうやって広げていくのか」といった質問には「事件が起こればそれがコミュニティになる。例えば近くで火事が起きると人が集まり、『何があったんですか』『原因は何だったんですか』などと言いあう小さな集団ができる。これがコミュニティの始まりだ。マンションや団地には近くに広場がつけられているはず。そこで事件を起こせば必ずコミュニティはできるのだ」という風に笑いを交えた回答により和やかな雰囲気で行われました。

4. 事後アンケート調査結果

分科会でのセッション後、参加者にアンケートを行い13名から回答をいただきました。以下はその集計の結果です。

(1) テーマについての評価

- 良かった…77%
- まあまあ良かった…15%
- 悪かった…0%
- 無回答…8%

■補足意見

- ・汗を流しているのがいい→よく共感できる
- ・非常に内容があり、楽しかった。パネリストの山田先生、寺田先生、平山さん、笑いの中に私たち大人が頑張らなければ、と思いました。
- ・内容が全く同感で、目からうろこ以上のものがありました。
- ・山田さんの発表が一番良かったです。

(2) 会議方式についての評価

- 良かった…54%
- まあまあ良かった…38%
- 悪かった…0%
- 無回答…8%

■補足意見

- ・もう少し(1時間)欲しかったです。
- ・パネラーのまとめが長かった。もう少しポイントをしばって話してほしいです。



ワークショップ風景



ワークショップ風景

(3) 子どもの感性等について気づいたこと

■子どもの感性

- ・大人が子どもの感性を止めるのではなく誘導していく必要がある。
- ・まだまだ残っている子どもの感性(いろいろやらせてみて感じる)→どう継続していくか?様々な活動の中で継続?何かをやらせてみないと感じない?→子どもの持っている感性(?)を引き出したり、伝える(継続する)事は可能(重要)→そういう子どもたちに、今のままを伝える?これからどうしていくか(どうしたらいいか)を伝える?
- ・大人以上に子どもの感性は敏感で新鮮であるから大切に育てたい。
- ・子どもの方が学ぶことをしっかり身につけている様に思う。しかし、大人側が教えこむ態度であったり上からの態度であったりすると子どもの感性は育たない。
- ・「ごっこ」遊びを1年間の最終に劇をして発表するという方式の幼稚園に実習に行ったことがあります。「リス」になり「枯葉」になり「ドングリ」になるまま発表するのですが、既成の漫画・アニメに影響されやすく、伝染性もあります。熱中しやすく染まりやすく、気移りしやすい子どもたちなので、大人が判断するのは難しいのですが、子どもに与えず、排除する情報も規制する必要があるのでは。
- ・びっくりするくらい、感じてるな、わかってるなと思うことがあります
- ・大の主軸での意見がほとんど。子どもの参

加で子どもの意見が聞ければ。

■ 環境学習

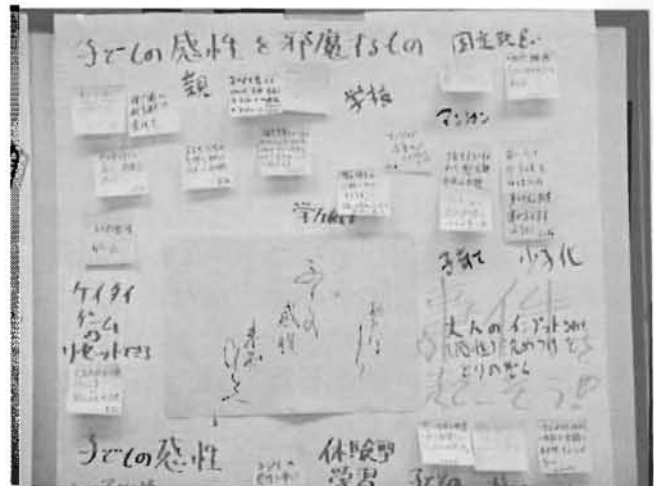
- ・継続した自然学習が必要。
- ・汗を流すこと——しかし頭のとっぺんで考えることが多いので、大人が子どもの頃を思い出してほしい。
- ・ただやるだけでなく継続すること、持続することが大切であることを教育してほしい。
- ・生活に密着したものであること。環境を教育したり学習したりすることは生活からかけ離れさせていることになる。
- ・自身の体験ですが、小学校の側に小川が流れていて、学校の堀の一部がわれていて、校内に支流のように流れていました。同じ小学校に通っていた子どもの思い出は休み時間のザリガニ釣りでした。
- ・子どもに積極的な参加を。



会場風景

■ 遊び

- ・ゲームでなく、体で遊ぶ。少子化も問題。子どもの遊び場が多い方がよいと思います。
- ・遊びながら学ぶことが、一生涯の知恵になることが大事。
- ・今は閉鎖されているようですが、遊び場を大切にするため、子ども自身で川をきれいに守っていたと思います。環境をつくって見守るということも大切ではないでしょうか。
- ・教えられることより、体で感じること、自ら体験することが一番の学習だと思います。
- ・自然体で遊ぶ環境を。



分科会成果

■ 子どもの参画について

- ・子どもが自分たちの力で楽しく続けられるようなテーマが必要。
- ・この会もまず1年とりかかることだ。
- ・参画してほしいですがこれが一番むずかしい。
- ・ワイワイガヤガヤ楽しそうにやっていると子どもは必ず近寄ってきます。参加から参画へのサポートは周囲の大人がやるべきだと思います。
- ・一部だけでなく、1年間、数年間かけて参加できるものがあるとよいのでは。
- ・「公園づくり」なら雑草とか古タイヤとか子どもがままごと遊びに手折っても怒られないような草花を植えるとかどうでしょうか。
- ・子どもから教えられる事、びっくりさせられる事は多いです。大人が学ぶ事は多いはず。
- ・時代活殺感覚の意見を聞いても？

(4) 分科会全体での意見

- ・これでよいと思います。
- ・今日のような議論に関心のあるものだけでなく、広く市民に伝える方法をみんなで考えたい。
- ・パネリストの方々の意見が三人三様、少しずつ違うタイプであったからこそ、様々な意見が聞けてよかった。
- ・来年も、このテーマを継続してください。子どもたちがつくる公園づくり（ユニセフ

パークプロジェクトとファシリテータ100名以上)の活動(国営明石海峡公園の神戸地区)がありますので、来年は是非パネルに推薦します。

- ・泥んこ学。継続が力。
- ・この子も、あの子も可愛いです。子ども大好き。子どもを叱るお母さんが多くなってきたように感じています。子どもたちの意見を聞きたい。子どもたちは、外で(広場で、川で、野原で、池で、など)遊んでほしい。力強く、たくましく、前向きにみんなで挑戦してほしい。

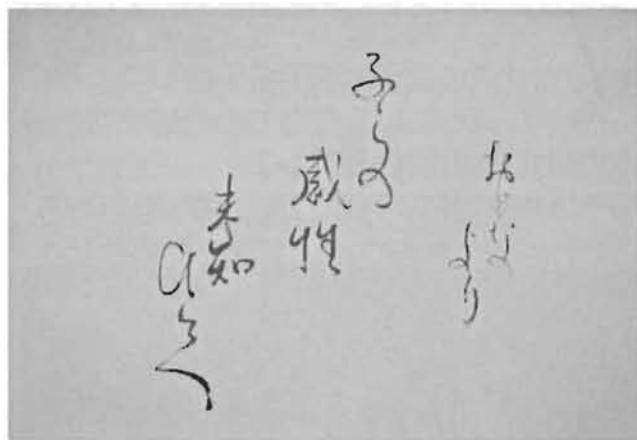
5. 木下氏(コーディネーター)のコメント

寺田さんの貝塚市立南小の近木川での子どもたちの調査が「河童Go!Go!」という171人総出の劇に結集するまでの子どもたちの感性のきらめき、平山さんの横浜鶴見川で長年小学校に協力して川探検をし、子どもたちが川原にピオトープをつくるという常識を覆すような発想をして行った体験、そして天気村の山田さんの破天荒のような発想ながら本質をついた子どもの感性を刺激する面白い仕掛けの数々、いずれもタイプは異なりますがテーマに関連して聞いている大人の感性がゆさぶられる話でありました。

まさに会場の聴衆の人たちも触発されてカードに書きながら、個別の質問と子どもの感性を邪魔するもの、そして子どもの感性を引き出すために何をしたらよいかについて議論が進んだと思います。

子どもの頃自分が体験した魚つかみを今の子どもらにさせたい、ケガは勲章、教育でなく遊育、子どものなにげない思いつきの言葉にハッとするものがある、イベントでは限界があり日常に、などなど。そしてとにかく子どもの感性をつぶしている社会全体を変えるには「事件がコミュニティーをつくる」という山田さんの事例から触発されて「事件を起こそう」というまとめに到達しました。

山田さん流の竜巻の旋風が吹いて、まさに大人の感性も汚れが落ちて輝きを取り戻したような分科会であったと思います。社会ではまだまだ子どもらに向き合う大人や真剣に子どものことを考える大人が少ないのが実際であり(今回も分科会参加者がもっとも少ない分科会であったことに象徴されるように)、次世代という時間のスパンでゆっくりと子らと感性のキャッチボールをする大人が、このような会合を重ねることで増えていくことを期待したいと思っています。



作 橋本夏次氏



会場風景

なく、バクテリアが元気に活性化して、いろんなことを分解していくということから、心を砕いていろいろな人が、別々な主体や経験を持ちより、混じり合って、単なる合体ではなく、溶け込んで、新しいものに発酵させていく、このときみんなのエネルギーやパワーをもらい、それを使い、新しいものへ繋げたり、新しくよみがえらせていきたいという結論を持ちました。

第3分科会「伝えよう子どもの未知普請」

木下 勇氏

子どもが被害者だけじゃなくて加害者にもなる痛ましい事件の問題点を意識しながら、もっと子どもを信じ、子ども達の感性が未来を開いていくことをテーマに、子どもの参画、子どもの声を聞き、子どもの感性を開き、未来をつくっていくにはどうしたらいいか、また、その為には、大人は何をしたらいいかを話し合いました。

貝塚市立南小学校の寺田さんより、子どもたちと一緒にいる“近木っ子探検隊”やフォーラムの活動を通して集まった子ども達の声や調査の結果をもとにつくったミュージカル「河童（かわっば）GO! GO!」や、その裏側についてのお話、子どもネットワークセンター天気村の山田さんからは、園舎のない保育園での活動を通して、子どもたちの感性が開かれていくというお話をいただきました。泥んこになり、ありとあらゆるところで子ども達が大人を巻き込んでいく事件が起こるといふ、非常にラディカルなびっくりした報告でした。鶴見川ネットワーキングの平山さんからは、学校と組んで、子ども達がピオトープをつくる中で、いろいろ切り開いてくる、子どもの感性が開かれている事例が紹介されました。

子ども達の感性をつぶしている、または、障害になっているのは何かという話題では、様々な制度、学校や親、大人の固定観念、学力偏重と学力低下論争、少子化、子育ての仕組み、携帯電話、IT、ゲームという事があげられました。さらに、最近の子どもの生き

物に対してリセットできるというような感覚は問題であるが、子ども達の感性はすばらしく、子どもの声に大人が耳を開けば、すばらしい展開があり、大切なことは、大人自身の態度やかかわり方ではないかということでした。また、子どもをもっと自由にする、泥んこになって遊ぶなど、子どもの力のエネルギー源を、大人が理解し進めていき、また、そういう活動を継続していく事が重要であるという結論を持ちました。



第3分科会

第4分科会 「広げよう人づくりの輪（ネットワーク）」

寺川 裕子氏

20年来、和歌山で道の緑化活動をされている古守さんより、殺風景な道端をきれいな花畑に変えたり、雨の中でも皆さんで緑化活動をしている様子などのご紹介をいただきました。重要なのは、個人の気持ちであり、自分自身の気持ちをどう未知普請につなげていくか、そんなお話から始めていただきました。フロリスケープディレクターの遠藤さんには、みんなが楽しむ場をみんなで作る時に、行政、市民、いろいろな立場の人たちが、使っている言葉や方法がばらばらの状態でどう進めていくかについて、「サスティナブルガーデニング」をキーワードにお話をいただきました。NPO法人エヌエスネットの北川さんには、大自然の中で様々な冒険的な試みや、将来の未知普請を担っていく人づくりについ

プログラムの立案などの業務に従事。東京都の環境学習用教材の企画・編集・制作、鶴見川流域ネットワークの事務局を務める。河川（特に鶴見川流域）に関わるイベントやセミナーの企画運営などに携わる。

（有）流域法人バクハウスを設立。河川管理者・学校・市民団体が連携し子ども達が川で活動できる学習機会を作り出すキャンペーンやセミナー「ふれあって鶴見川」「鶴見川・いき・いきセミナー」「夢討論会」を運営。地域の子どもの交流プログラムに参加している。

山田 貴子（やまだ たかこ）

NPO法人子どもネットワークセンター天気村理事長
こどもの頃より、21世紀を意識して“とき”を刻んできた自分があり、社会の変化や違いは必然で、その変化や違いの中に身を置いて、自分の判断で考え頭と一緒に体も動かす。その瞬間、瞬間の過程に重きを置いて、又“考動”する。これからも、こどものように、ひたむきな情熱、ものの見方や考え方が純粹であるといったところで共感し合い、調和して“考動”を続けていきたい。

《 第4分科会 》

●コーディネーター

寺川 裕子（てらかわ ひろこ）

NPO法人里山倶楽部理事
里山活用・まちづくり・環境教育・環境計画の実践をおこなっている。近畿各地で市民主体の森づくり協議会や川のワークショップなど各種市民活動を支援するコーディネーター（企画・まとめ役）、ファシリテーター（進行役）として活躍している。

●パネリスト

遠藤 尚美（えんどう なおみ）

フロリスケープ ディレクター

平安女学院短期大学英文科卒業。1級造園施工管理技士。（有）ワシオアソシエイツ 企画・設計室長を経て、遠藤緑花計画室 主宰。現在（有）サステナブル・e取締役。育児期間中に、植物・公園・環境などに関心を持ち現在の仕事を始める。建設コンサルタント、（有）ワシオアソシエイツ入社。アジアではじめて開かれた園芸博「国際花と緑の博覧会」の園芸プロデューサーをはじめ、花を造園に取り入れた「フロリスケープ」（フラワーランドスケープ）の第一人者である鷲尾金弥氏のもとで本格的な勉強と実践を積む在職中、造園の設計・施工・管理業務にトータルに携わりながら、公共スペースにおける持続的な植物管理のあ

り方をハード・ソフトの両面から提案してきた。現在、府民ボランティアと行政のよりよいパートナーシップによる「植物を媒体とした地域づくり」として「サステナブル ガーデニング」を方針に、環境を考慮した地域づくりのための緑化の推進や協働のあり方について緑花ボランティアの人材育成や職員研修の企画・コーディネーター・講師を務める。

北川 健司（きたがわ けんじ）

NPO法人エヌエスネット

日本リバーガイド協会副会長、中部山岳ガイド協会会長、大阪外国語大学非常勤講師、NPO法人広域防災水難救助捜索支援機構副理事長、（株）アウトドアサポートシステム代表取締役

高校時代から山登りを始め、大学では山岳部。ヒマラヤの遠征やマッキンリーの単独登頂、ヨーロッパアルプス、ニュージーランド等、山三昧の青春を過ごす。シルクロードをパキスタンからアフガニスタン旅行や、トルコ・チョールー川、パキスタン・インダス川、アメリカ・コロラド川、コスタリカ・ユベントス川、オーストラリア・タリ川、ニュージーランドでは5本の川を下るなど川遊びに転身。長良川でラフティングの日本選手権を主催し、全国から50チーム300人の参加を得て今年で11回目を開催する。現在は、四季を通しての山岳ガイドと子ども達と源流の山での長期キャンプやシャワークラiming、冬のキャンプを楽しんでいる。

古守 一晶（こもり かずあき）

NPO法人花つぼみ理事長

和歌山県白浜町出身。田辺市在住。田辺高校を卒業後、旧阪和銀行に6年間勤務。その後、現在まで、実家で縫製工場を経営している。1983年花つぼみ会を発足。花いっぱいコンクールで建設大臣賞、環境美化運動の功績で環境大臣賞受賞に導く。南紀熊野体験博では、企業や団体等の協力を得て、国道に花のロードを実現。

榎木 武（ちしやき たけし）

道守九州会議代表世話人

九州大学名誉教授、日本道路公団九州ハイウェイ懇談会、九州地方整備局事業評価監視委員会、NPO法人みちしるべ会議代表理事、NPOタウンコンパス理事長

昭和14年、滋賀県出身。九州大学工学部土木工学科卒業。長崎大学助教授、九州大学助教授、カリフォルニア大学留学、九州大学教授、（現在）九州大学名誉教授。